八幡神社と三十六歌仙額

原　豊二

八幡神社への招待

米子市東八幡に鎮座する八幡神社。現在、米子高専教員を中心とした調査研究組織「八幡神社プロジェクト」により、建築物・文学資料・和本・古文書・絵画等の調査が進められている。本冊子では、主に八幡神社所蔵の「三十六歌仙額」を通して、地域の文化の粋を考えていきたい。

八幡神社の創建は古く、社伝には養老四年（720年）とある。このことの確証はともかくとしても、平安時代・天永年間とある棟札の写しが当社に伝わることなどから、この地域でも最も古い神社の一つであると考えてよいだろう。

当社は、中世以降の八幡信仰が「武運長久」と関わっていくことから、武士の神様、戦の神様として多くの信仰を得たと考えられている。また、江戸時代には、吉田神道の組織下でこの地域の神社の総取りまとめとしての役割も担っていた。

現在、八幡神社は、地域の神社として多くの人々の憩いの場となっている。そして、古くからの社有物を今に伝え、地域の人々のルーツを知る手掛かりも提供している。

それでは、八幡神社の伝えた歴史・文化、またその精神世界を垣間見ていこう。

表紙の写真：（上）八幡神社所蔵絵馬　（下）三十六歌仙額のうち素性法師

源順
（みなもとのしたごう）

柿本人麻呂
（かきのもとのひとまろ）

中村一忠奉納「三十六歌仙額」

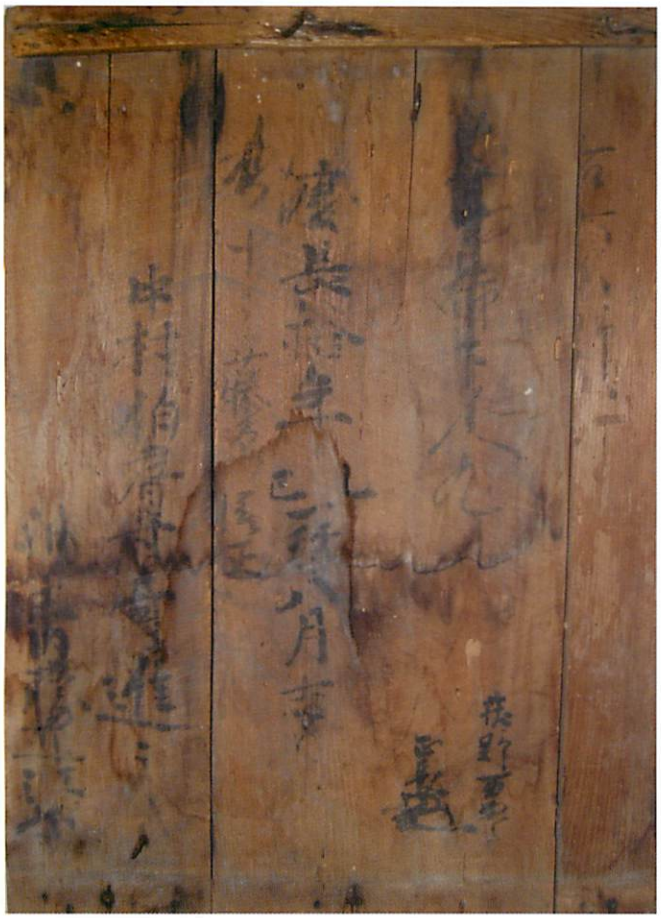
今回、八幡神社から発見されたものの一つとして、「三十六歌仙額」というのがある。「三十六歌仙」とは、平安時代までの著明な歌人36人の和歌をまとめた『三十六人撰』（藤原公任の編）に起源を持つ歌人群で、室町時代以降、歌仙額として多くの神社に奉納された。左右を18人ずつに分け、その描写は様式化されている。

八幡神社の「三十六歌仙額」は、初代米子藩主の中村一忠による、慶長十年（1605年）の奉納である。現存するものは、36枚中24枚で、保存状態は剥落や破損などで決してよいわけではない。また、中村一忠奉納後も幾度かの補修・改装が行われている。大きさは、それぞれ縦約53センチメートル、横約38センチメートルであり、元禄時代の記録では、この額は社頭に掲げられていたという。

上の写真のうち、左側は源順で、平安時代の貴族であり、歌人である。『倭名類聚抄』という書を後世に遺している。また、右側は柿本人麻呂である。人麻呂は「万葉歌人」であるが、後世になってから和歌の神様として崇められた。

裏書きによれば、この歌仙額の作者は「荻野正長」であるが、この人物がどのような人物かは不明である。しかし、この歌仙額が上方で作られたことを想定すれば、当時の京都周辺に在住した画人であった可能性が高い。

若き中村一忠は米子藩の安寧と繁栄のため、この額を寄進したのであろう。その一忠の急死により中村家は断絶してしまうのだが、今にその遺風を伝えている。



裏書きから考える（慶長期）

歌仙額の裏書き（写真左）を見ると、これが「慶長拾（十）年八月」に八幡神社に奉納されたことがわかる。また、左側には「中村伯耆守奇進之」ともある。

慶長十年は西暦で1605年であるから、時代で言えば江戸時代の最初期である。1600年に関ヶ原の戦いがあり、その5年後のこと。ちなみに、徳川家康はいまだ存命している。まだまだ、戦国時代の混乱が収まり切らない、そういう時代である。

米子藩は江戸初期にしか存在しなかった幻の藩でもあり、その時代の資料は貴重であると言える。その藩主であった中村一忠が奉納したということは、この八幡神社が多くの尊崇を受けていたことの証左でもあろう。

左下方にはその時の神主・内藤近江守の名が、また右下には画人・荻野正長の花押などが見られる。

裏書きから考える（元禄期）

右の写真も裏書きであるが、だいぶ白い部分がはがれている。左下（右に拡大）には「竹内氏自安敬記」とあり、これは元禄期に活躍した米子の歌人・竹内自安斎による為書きであることが確認できる。

写真には「元」の字が見え、また「庚」の字の一部が見えることから、元禄三年（1690年）にこれが書かれたことがわかる。

この歌仙額は慶長期に制作・奉納されたものだが、実は元禄期に改装されたのであった。自安斎の旅行記『伯陽六社みちの記』に、自ら八幡神社の歌仙額の和歌を書いたことが記されており、他の資料からもこの事実は確認できる。

八幡神社・三十六歌仙額　和歌解読

左1　柿本人麻呂　　ほのぼのと明石の浦の朝霧に島隠れ行く舟をしぞ思ふ
左2　凡河内躬恒　　住吉の松を秋風吹くからに声打ち添ふる沖つ白波
左3　大伴家持　　かささぎの渡せる橋に置く霜の白きを見れば夜ぞ更けにける
左5　素性法師　　音にのみきくの白露夜はおきて昼は思ひに敢へず消ぬべし
左6　猿丸大夫　　遠近(をちこち)のたづきも知らぬ山中におぼつかなくも呼子鳥かな
左7　藤原兼輔　　人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな
左8　藤原敦忠　　伊勢の海の千尋の浜に拾ふとも今は何てふかひかあるべき
左9　源公忠　　行きやらで山路暮らしつ郭公(ほととぎす)今一声の聞かまほしさに
左12　源宗于　　ときはなる松の緑も春来れば今一入(ひとしほ)の色増さりけり
左13　藤原清正　　天つ風吹飯(ふけい)の浦にゐる鶴(たづ)のなどか雲居に帰らざるべき
左16　小大君　　岩橋の夜の契りも絶えぬべし明くる侘しき葛城の神

右1　紀貫之　　大原やをしほの山の小松原はやこだかかれ千代の影みん
右5　紀友則　　夕されば佐保の川原の川霧に友まどはせる千鳥鳴くなり
右6　小野小町　　色見えで移ろふものは世の中の人の心の花にざりける
右9　壬生忠岑　　有明のつれなく見えし別れより暁ばかり憂き物はなし(写真右下)
右10　大中臣頼基　　一節(ひとふし)に千代に込めたる杖なれば突くとも尽きじ君がよはひは
右11　源重之　　夏刈りの玉江の葦を踏みしだき群れゐる鳥の立つ空ぞなき(写真左下)
右13　源順　　水の面(も)に照る月次(なみ)を数ふれば今宵ぞ秋の最中(もなか)なりける
右17　壬生忠見　　恋すてふ我が名はまだき立ちにけり人知れずこそ思ひ初(そ)めしか
右18　中務　　秋風の吹くにつけても訪(と)はぬかな荻の葉ならば音はしてまし

源重之　和歌部分

壬生忠岑　和歌部分

赤外線撮影で見えるもの

藤原朝忠の顔

最新の赤外線撮影で、肉眼では判然としない部分を見ることができる。赤装束に比べ、あまり見えなかった朝忠の顔が見えるようになった。特に、烏帽子と後頭部が鮮明である。

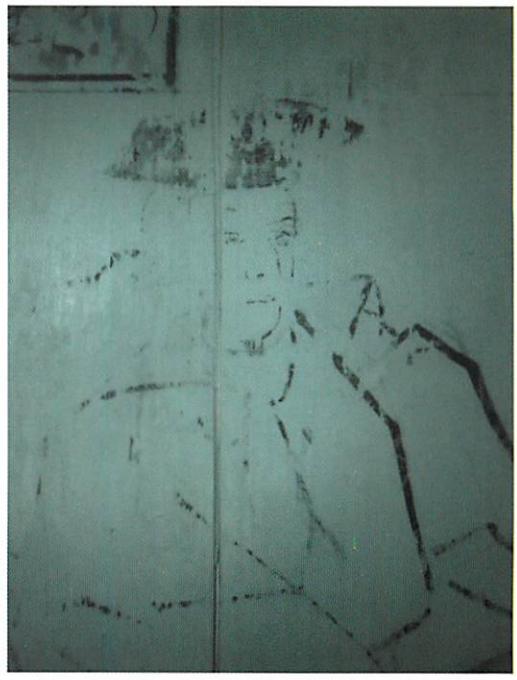
源宗于の姿

こちらも肉眼では見えにくかったが、源宗于の姿が判然とした。烏帽子を下げている姿勢がわかる。このような技術で「歌仙額」の往時を偲ぶことができる。

改装された歌仙絵

1枚の歌仙額を見てみよう。まずは裏側(写真左)であるが、「右一紀貫之」が消され、「右三山辺赤人」と訂正されている。

次に表側の絵(写真右)を見ると、横になった烏帽子をかぶる人物が描かれている。この絵は万葉歌人の姿をしており、紀貫之ではなくむしろ山辺赤人を描いたものであろう。赤外線撮影によって、このような事実が見えてきた。



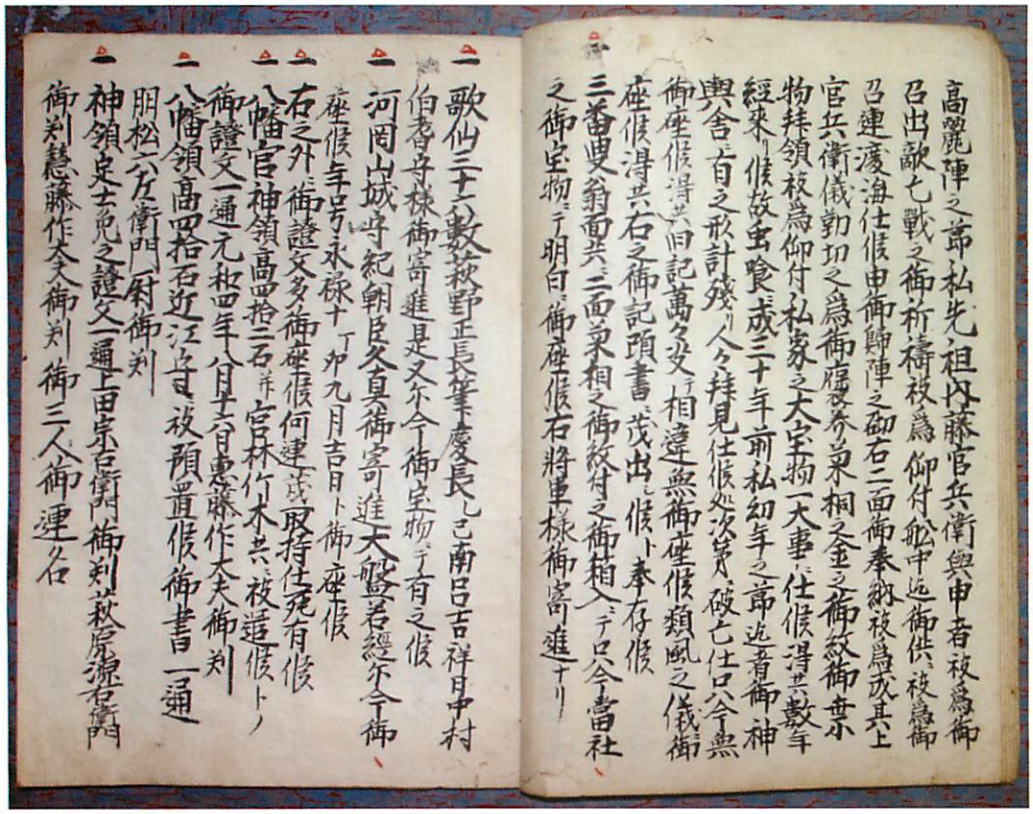
左の写真は、この額の和歌部分。赤地に大きな字で「や木たかかれ」「代のかけ見ん」とあり、ここは古い時期に書かれたと考えられる。紀貫之の「大原やをしほの山の小松原はやこだかかれ千代の影みん」の歌の一部であろう。大きな字体は江戸初期の書風を思わせ、これは慶長時代の書写と考えたい。

これとは別に、「(田)鶴(鳴)」と中央上部に白地に書かれている文字がある。これは後に書き換えられたところで、山辺赤人の「和歌の浦に潮満ち来れば潟をなみ葦辺をさして鶴鳴き渡る」の一部であろう。よって、1枚目の裏書きが示すように、これは貫之の額を赤人の額に改装したものと考えられる。

おそらく、このような改装の理由は、どんなに表面を改めても、中村一忠奉納時(慶長10年)の具材を使い続けることに意義を見出したことによると考えられる。つまり、新たに歌仙額を作ってしまっては、その額の権威はないも同然となってしまう。これらの額は、その姿を大きく変貌させようとも、あくまで一忠奉納の額として伝えられる必要があったということである。

さて、追い出された貫之はどこに行ったのか？

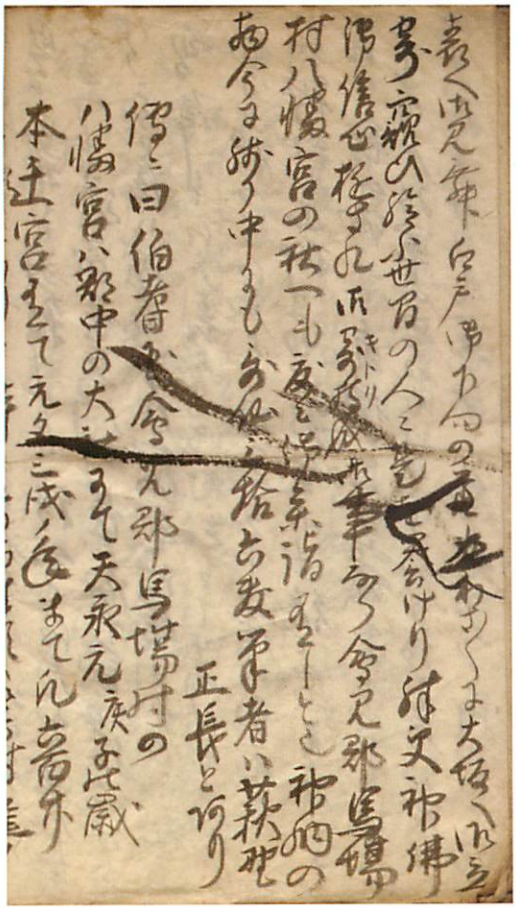
「三十六歌仙額」を記す



左の写真は八幡神社に伝わる「社伝」である。18世紀後半のものと思われるが、様々な情報を私たち伝えてくれる。

ちょうど中央部分に「歌仙三十六数荻野正長筆」云々とあって、この「三十六歌仙額」が古くからこの神社の宝物として扱われたことがわかる。

他の神社所蔵物の由来も書かれており、現存するもの、そして失われたものの情報が読み取れる。



左は、米子市立図書館所蔵の『中村記』である。『中村記』は、中村一忠の事跡を描いた実録物で、江戸時代中期以降に成立したと考えられる。

中ほどに「歌仙三拾六枚筆者は萩(荻)野正長とあり」とあって、この「三十六歌仙額」が、八幡神社を度々参詣していた一忠によって奉納されたことを記している。

写本にもよるが、『中村記』には八幡神社が多く描かれており、興味深い。

いつぞや此神宮伊豆望みしに、いなみがたき事おほくて、歌仙の詠かきてつかはせしを、社頭にかけおき侍る。今みるに、見ぐるしさえもいはず。みざらん世まで、みづからいくばくの恥をかき残し、…。

(『伯陽六社みちの記』より。)
元禄七年、作者・竹内自安斎が歌仙額の和歌を書いたことが記されている。

報道された「三十六歌仙額」

9日(火曜日)　山陰中央新報

米子市東八幡の八幡神社で、米子藩の初代藩主・中村一忠(1590～1609年)が同神社に奉納したとされる「三十六歌仙額」の一部が見つかった。過去の文献に登場しながらも、行方が分からなかった。同藩は10年の短命で終わっており、調査した米子高専の原豊二准教授(古典文学)は「幻に近かった米子藩の実態を知る上で貴重な史料」としている。同准教授が28日、発表した。

米子・八幡神社土蔵から
中国地方で最古？
三十六歌仙額の一部発見

八幡神社で見つかった三十六歌仙額を確認する原豊二准教授（中央）と内藤和比古さん（左）

三十六歌仙額は紀貫之、小野小町など歌人36人の肖像画と和歌を描いた木板。室町後期以降、全国の守護・戦国大名が神社に奉納し、拝殿に飾られた。国の文化水準の高さを示す象徴とされる。

八幡神社で見つかったのは24枚。1枚の大きさは縦53㌢、横38㌢で一般的なサイズという。1605（慶長10）年に奉納された裏書きがあり、幕末に編さんされた地誌「伯耆志」にある「慶長十年、中村伯耆守一忠、三十六歌仙の図を納めらる」の表記と一致した。

裏書きから狩野派の画家が描いたことも分かったが、保存状態が悪く、絵の大部分がはげ落ちているものが多い。

同神社の内藤和比古宮司(70)が、自宅の土蔵の調査を原准教授に依頼して、存在が分かった。原准教授は、中国地方で確認されている三十六歌仙額では最古として「中央の文化をいち早く取り入れており、当時の米子は高い文化水準にあったのではないか」と推察する。

内藤宮司は「奉納があったことは、伝承や地元に残る古文書で知っていたが、まさか実物が出てくるとわ思わなかった」と驚いた。

45議案可決し閉会
米子市議会

3月定例米子市議会が28日、総額559億5900万円の2011年度一般会計当初予算案、国民健康保険（国保）の保険料を平均10・0％引き上げる条例改正案など計45議案を原案通り可決し、閉会した。

「活性化に結び付けて」

米子

バレー

け決定

(23)　地域総合　2011年(平成23年)3月29日　火曜日

初代米子城主・中村一忠奉納
「三十六歌仙額」見つかる
米子・八幡神社 中国地方最古

初代米子城主・中村一忠奉納の三十六歌仙額＝28日、米子市東八幡の八幡神社

初代米子城主の中村一忠が、1605（慶長10）年に奉納したとされる「三十六歌仙額」のうち24枚が28日までに、米子市東八幡の八幡神社で、中国地方で最古、全国でも9番目に古いものとみられる。専門家は「伝承から実態に近づく貴重な史料」と注目している。

同神社で古文書の調査をしていた米子高専の原豊二准教授(39)らが2月中旬、社務所の土蔵内で荒縄で縛られた板切れを発見。三十六歌仙額であることが分かった。24枚のうち2枚は歌人が未確定。縦約53㌢、横約38㌢の杉板に和歌の上の句、下の句、歌人の姿絵が描かれている。

裏書などから、1690（元禄33）年に歌人・竹内自安により補修されているが、絵は狩野派の流れをくむ荻野正長の作、書の作者は不明で、書体の違いなどから慶長と元禄の書が混在していることが考えられるという。

内藤和比古宮司(70)は「歴史的、文化的遺産が残っていたことは、地域の人にとってもルーツの誇りになる」と話した。原准教授は「八幡神社プロジェクトを立ち上げ、建築や文学、宗教、歴史など総合調査を続けて解明していく」と述べた。

三十六歌仙額は、鳥取市上町の樗谿神社、松江市殿町の松江神社や同市鹿島町の佐太神社などにも所蔵されている。

「コナン」縁
滋賀・湖南

漫画「名探偵コナン」を活用した町づくりを進める北栄町に、「コナンのまち」から訪問団が訪れ、将来的な友好都市提携を視野に、同町の松本昭夫町長らと意見交換を行った。

北栄町を訪れたのは、滋賀県湖南市の谷畑英吾市長や観光物産

朝日新聞　鳥取版　10版　2011年(平成23年)3月31日　木曜日

三十六歌仙 中国地方最古の板絵
米子・八幡神社 初代藩主が奉納？

柿本人麻呂の板絵

小野小町の板絵

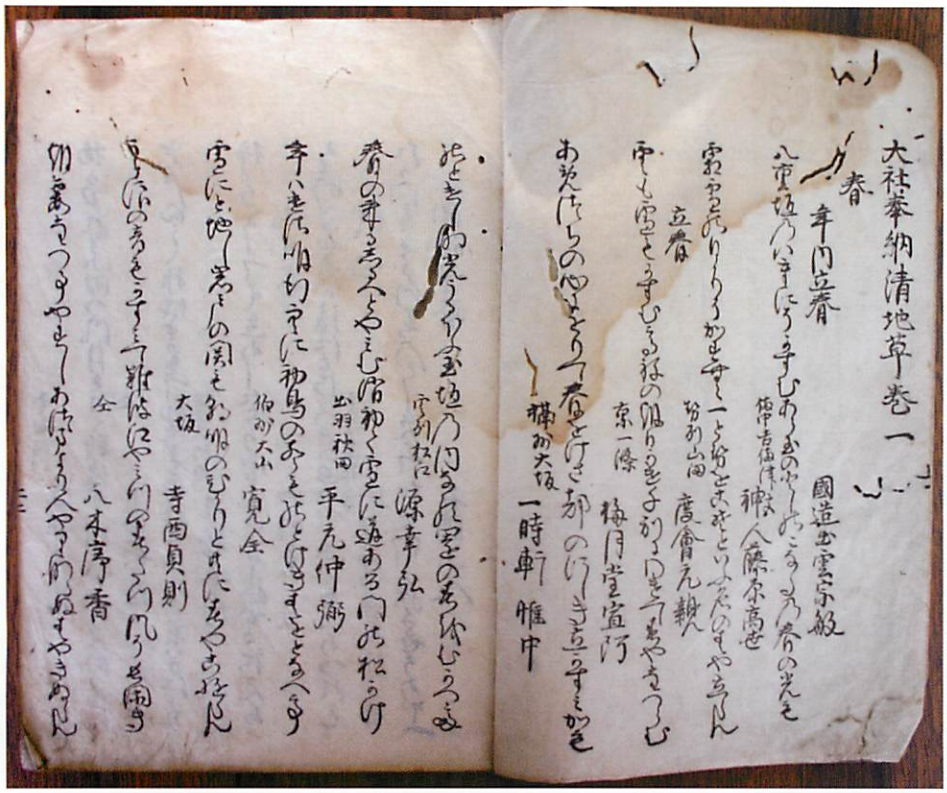
小野小町や柿本人麻呂らを描いた板絵「三十六歌仙額」が米子市東八幡の八幡神社で見つかった。三十六歌仙の板絵は珍しくないが、1605（慶長10）年に奉納したという裏書きから、中国地方で最も古いとみられる。

2月中旬、神社社務所の土蔵から24枚の板絵が出てきた。三十六歌仙とは平安時代中期の歌人、藤原公任（きんとう）が選んだ36人の和歌の名手。縦約53㌢、横約38㌢の杉板に十二単の小野小町や烏帽子姿の柿本人麻呂らが描かれている。当時活躍した画家集団「狩野派」の門人、荻野正長の筆とみられる。宮司の内藤和比古さんによると、神社に伝わる古文書には初代米子藩主の中村一忠が板絵を奉納したという記述があるという。

板絵を発見、調査した米子工業高等専門学校の原豊二准教授は「慶長8年に米子藩で家老の横田内膳（ないぜん）が暗殺される『横田騒動』が起きた。弱体化した藩の繁栄を願い、中村一忠が奉納したのでは」と話す。内藤宮司は「博物館などに寄託して多くの人に見てもらい、郷土の歴史に興味を持って欲しい」と言う。（高井和道）

「三十六歌仙額」の発見は地域のニュースとして広く伝えられた。新聞（日本海新聞、山陰中央新報、朝日新聞鳥取版）だけでなく、テレビ（NHK、BSS、中海テレビ）でも報道されている。上の写真は、中海テレビの「米子高専知的セミナー」の撮影風景。

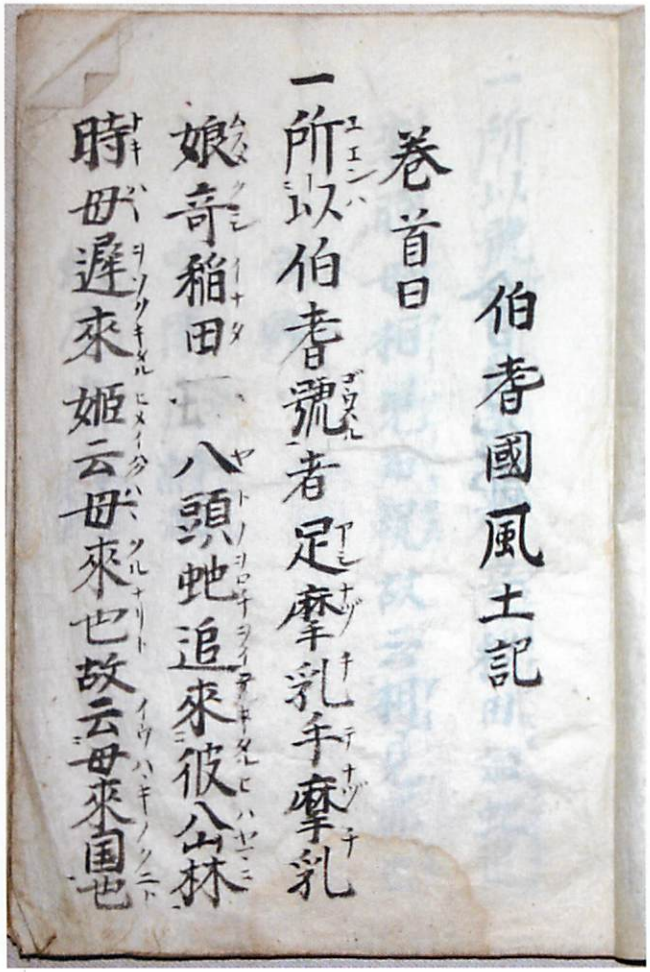
米子の古典文学資料



八幡神社には他にも古典文学に関わる資料が多く遺されている。

左は『清地草』(すがぐさ)という和歌集である。これは、出雲大社に奉納するために、竹内自安斎が編纂したものである。印刷物であるにもかかわらず、現存することは極めて稀で、出雲大社や伊勢神宮などにだけ収められている。

八幡神社所蔵本は下巻を欠いているのが残念であるが、編者・自安斎の地元である米子地域から出現した意義は大きいと言える。自安斎自身による、当社への献納の可能性が高い。



右の写真は、『伯耆会見風土記』という本である。これは、この度初めて実物が発見されたもので、「奇書」として独特の世界を私たちに伝えてくれる。

風土記は古代に各国で編纂された地誌であり、現存する『出雲国風土記』はよく知られている。この『伯耆会見風土記』は巻末に「天平五年(733年)書之」とあり、また古代の風土記の体裁をとってはいるが、実は江戸時代の後期に作られた一種の「偽書」である。幕末の地誌『伯耆志』はこの書を取り上げ、強く批判しているが、この本の内容は大変面白い。例えば、「伯耆」の国号や「会見」の郡号の由来を神話に則って叙述したり、スサノオや稲田姫の詠歌を創作したりと、全体として『古事記』と『出雲国風土記』からの強い影響を受けつつ、独自の想像力によって古代の伯耆地方が描かれている。作者は、いたずら好きな米子の人物であろうか。

伝えるべきこと　伝えられるべきこと

私たちが未来に伝えていくべきことは、いったい何でしょうか？単に「古いものを敬え」という考え方では、決して地域の文化が充実することはありません。私たちは、今に遺されたものから、何を学ぶべきなのでしょうか？

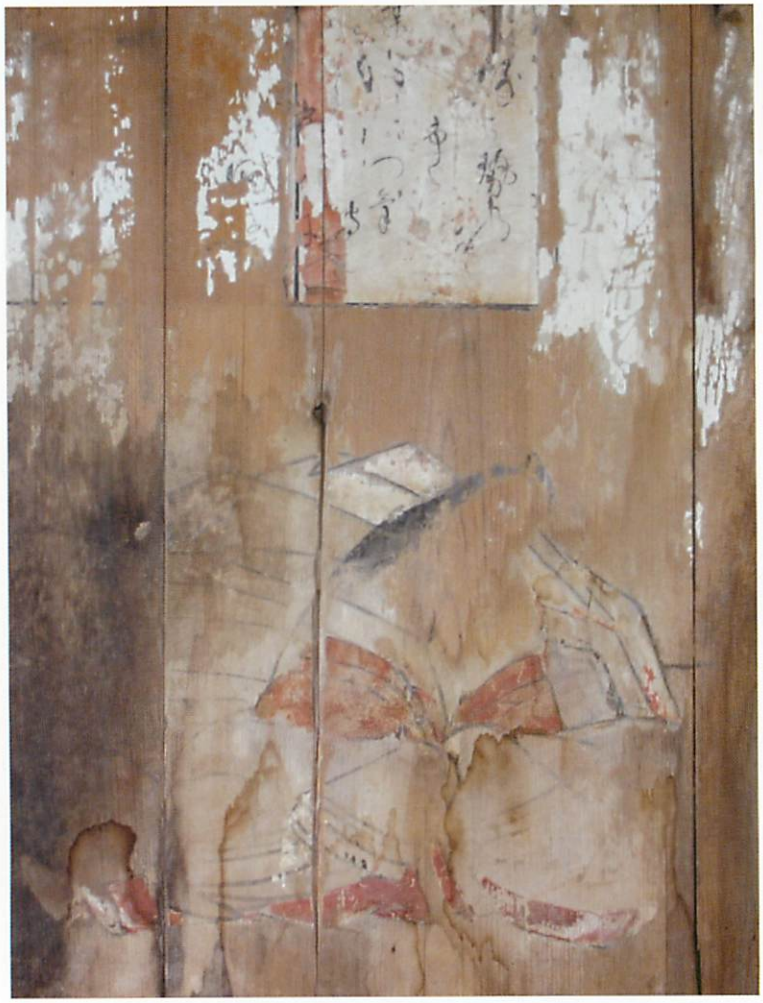
そうです、こうした文化遺産の醍醐味は、その時代に熱く生きた人間たちを身近に想像することができることなのです。私たちの先輩たちが、いったいどのような生き方をし、そして何に歓び、何に悲しんだのか、そうした心の中を私たちは知ることができるはずなのです。

2011年3月、日本列島は大震災に見舞われました。地震や津波だけでなく、原子力発電所の事故など、取り返しのつかない悲惨な現実に、心を痛める日々が続いています。そして、多くの人命とともに、多くの先人たちの遺品も失われてしまいました。

もし、このような苦難の中で、少しでも希望を見出すとすれば、それはいったい何なのでしょうか？実のところ、私もわかりません。おそらく、「わかる」ようなことではないのかも知れません。それでも、私たちは生き続けます。そして、生き続けなくてはなりません。

その時、「古いもの」というのは、何らかのヒントを私たちに教えてくれるに違いありません。「昔の人」、「今の人」、「未来の人」、きっとどこか似たところがあるのではないでしょうか？

(2011.10.10)



中務
(なかつかさ)

八幡神社と三十六歌仙額
発行日:2011年11月1日
発行:米子工業高等専門学校　原豊二研究室
〒683-8502　鳥取県米子市彦名町4448
TEL 0859-24-5072
編著者:原　豊二
印刷・製本:合同印刷(株)
〒683-0102　鳥取県米子市和田町2005-2
TEL 0859-25-1232

※本冊子は、米子工業高等専門学校・教育研究活性化経費(地域に根ざした特色ある研究経費)によって制作されている。

日本海新聞 平成23年10月25日(火) 8面

「中村一忠と八幡神社展～速報～」に寄せて

最新の資料調査結果

米子市立山陰歴史館で28日開幕

米子市立山陰歴史館で28日から、「中村一忠と八幡神社展～速報～」が開催される。本展示は1月からの八幡神社（米子市東八幡）の総合的な資料調査を基にしており、文学・歴史のみならず美術・建築などの専門的な研究者たちの調査結果が披露されることになるだろう。

例えば、中村一忠奉納の三十六歌仙額は古典文学の資料であり、同時に歴史的な遺物でもあり、さらに美術史的な鑑定も求められる扱いづらい作品である。こうした多角的な視点から扱うべき資料は、米子高専ならびに県立博物館の若手研究者によって、最新の知見と技術をもってして調査がなされている。歌仙額のデジタル赤外線撮影などは、こうした調査の一環といえる。

本展示では、1次資料を特に重視した。例えば、事実関係が曖昧なまま議論されてきた中村一忠については、『中村記』『伯耆民談記』などの江戸時代の写本から、慎重にその事跡を見直すことを考えた。

現在の一忠研究（横田内膳研究も）はあまりに伝承に基づいていて、こうした後代の資料から孫引きされていることが少なくない。むしろ、中村時代の遺物から直接うかがえることを考察することが求められている。

資料には全くの偽物もある。『伯耆会見風土記』は奈良時代の風土記を模した江戸時代の偽作であるが、この本の存在は、こうした偽物を作る力が当時の米子の人々にあったことを示唆している。偽作はその時代に何が求められたのかということ、その地域の知性や教養のレベルを推し量ることのできる絶好の資料にもなる。

八幡神社所蔵の中世からの資料群も大きな魅力である。所蔵資料は現在も調査が進行中であり、その全体像はいまだ計り知れないが、「速報」ということであれば、多少の勢いは許容されるであろう。

伯耆一国の支配者であった中村一忠と平安時代からの古社・八幡神社。本展示から新たな伯耆地方の歴史が明らかになるに違いない。

（米子高専准教授・原豊二）

◇「中村一忠と八幡神社展～速報～」は28日から12月4日まで、米子市中町の市立山陰歴史館で。

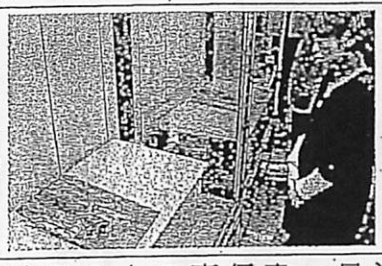
八幡神社から見つかった三十六歌仙額のうち源順を描いた一枚

日本海新聞　平成23年10月27日(木)　21面

三十六歌仙額など貴重資料

「中村一忠と八幡神社展」米子であすから

米子市東八幡の八幡神社(内藤和比古宮司)から見つかった歴史資料を展示する「中村一忠と八幡神社展」が28日、同市中町の市立山陰歴史館で始まる。中国地方最古級の三十六歌仙額など約30点の貴重な資料が並び、伯耆地方の歴史を探る。12月4日まで。



初公開される八幡神社の三十六歌仙額＝米子市中町の山陰歴史館

八幡神社は平安時代に起源がさかのぼり、江戸時代には伯耆国会見郡の中心的な神社だった。文学資料や古文書、絵画などが数多く伝わり、1月から米子高専の原豊二准教授(39)らが調査している。

三十六歌仙額は1605(慶長10)年、米子城主の中村一忠が同神社に奉納。見つかった24枚のうち、源順(したがう)と藤原朝忠(あさただ)を描いた2枚を初めて公開する。

歌仙額は傷みが激しく、消えかかった歌人の絵が赤外線撮影で鮮明に表れた画像をパネルで紹介。絵が後に描き換えられた事実が、赤外線撮影で分かったことも説明する。

江戸時代中期以降に書かれた一忠の伝記『中村記』(米子市立図書館蔵)も展示。一忠がたびたび八幡神社を訪れ、三十六歌仙額を奉納したことを記している。

原准教授は「米子には江戸時代の資料がたくさん残っている。実物を見て歴史を知ってほしい」と話している。

午前9時半～午後6時、入場無料。28日午前11時からギャラリートークがあり、原准教授が展示内容を解説する。

米子市立山陰歴史館

中村一忠と八幡神社展

中村一忠と八幡神社展

～速報～

平成23年
10月28日(金)～12月4日(日)
会期中無休

開館時間・午前9時半～午後6時
（入館は午後5時半まで）
会場・米子市立山陰歴史館 第一展示室
観覧料・無料

初代米子城主 中村一忠

八幡神社

主　催：財米子市教育文化事業団［米子市立山陰歴史館］
共　催：米子市・米子市教育委員会
協力・資料提供：八幡神社・国立米子工業高等専門学校
監修・資料提供：原　豊二（国立米子工業高等専門学校准教授）・内藤和比古（八幡神社宮司）

［開催日］ 平成23年10月28日～12月4日
［開館時間］ 午前9時30分～午後6時（入館時間は、午後5時半まで）
［開催中の休館日］ 会期中無休
［会場］ 第一展示室
［観覧料］ 無料

主催：（財）米子市教育文化事業団[米子市立山陰歴史館]
共催：米子市・米子市教育委員会
協力・資料提供：八幡神社・国立米子工業高等専門学校
監修・資料提供：原　豊二（国立米子工業高等専門学校准教授）・内藤和比古（八幡神社宮司）